

特別座談会

脳科学介入で
歯科が変わる

医師と歯科医師が語る全身と口腔の健康

閉塞感漂う
今の歯科界

齋藤 現在の歯科医療には、閉塞感を感じていると思います。今のままではいけないと思うもの、何をしてもいいか見えない感じがするのではないのでしょうか。

脳科学によって歯科医療の未来が変わる可能性が出てきている。閉塞感が漂い、多くの歯科医師が、今のままではいけないと感じている。歯科界に求められるものは何か、ディ・ビー・エス代表の齋藤忠氏を司会に、最先端の脳科学を追求している脳科学学校の代表、加藤俊徳氏と、歯科臨床を離れて口腔生体医学に専事する荒井正明氏、臨床の立場から小林充治、佐野真弘の2氏に、歯科界の問題点や脳科学の介入がもたらす未来について語ってもらった。

その宿題を解き続けたら、自分を取り組まざるを得ない。患者さんのため、自分のため、たまたまの偶然からくるのではなく、患者さんのための治療なのではないか、患者さんのため、治療して、いい感じになってしまったらいいですね。

鍵はビジョン
と人材活用

加藤 先生の先生の脳画像を見ても、率直な感想としては、歯科の分野は人材の宝庫だと思っています。

未病医療の
原点に返る

齋藤 これからすべての医療分野が未病への対応にシフトしていきます。歯科医療はもとより未病医療のハブになります。

臨床医の長年の疑問が
脳を介し、エビデンスに

小林 明らかに、歯科医師は、歯牙の疾患に対する歯科治療に従事するだけだと思っています。大学の6年間で学んできたのは、歯科医学の知識と臨床技術だけなのです。

佐野 日本の保険制度によって、歯科医師はがんがらみになっている。面は広い、と思いませんか。保険で認められている以上、そのルールに則った治療が大半を占めます。

もとの、新しい分野と手組むこと。過去の歯科医療に比べて、今、提供しているサービスは、大きく変わっています。

加藤 やは、疾病保険で、病名が付かないと保険給付がつかないのは、大きな問題だと思います。

齋藤 後世のために、歯科医療がどこへ向かうべきか、突き詰めていきたいと思います。

小林 今までの歯と全身との関係を証明する方法が見つけられませんか。

荒井 脳科学に触れて、驚くほど気なっている動作が、脳にどうも意識深い、ものだと気づく意識するようになった。

齋藤 様々な脳科学の可能性がある。脳科学を通して見ようとして、脳と人間の関係を研究しようとする。



荒井氏



加藤氏

- 出 加藤 俊徳 脳の学校代表取締役・医師
- 席 荒井 正明 口腔生体医学研究所所長・歯科医師
- 者 小林 充治 歯科医師(岡山県開業)
- (敬称略) 佐野 真弘 歯科医師(東京都開業)
- 司会 齋藤 忠 ディー・ビー・エス代表



小林氏



佐野氏



齋藤氏

有望ある歯科
は未来をみる

加藤 歯は人間にとって、一番分りやすい場所にある。その奥を探らなかつた経緯があるのではないのでしょうか。

齋藤 私は歯科の分野を突き詰めること、発症と予防のコントロールをどうするか、という考えで、感覚を取れば良い、という考えで行われてきました。

齋藤 脳に良い影響
及ぼす人間学

齋藤 脳科医師には左脳タイプの人が多く、右脳タイプの人が少ない。人間学を学ぶことが、脳に良い影響が出るのではないか。

齋藤 脳科医師は、現段階でもかなりの強さや、右脳から左脳まで、治療を証明することができると言っています。